

吉井郷土資料館・第41回企画展 養蚕教師と蚕糸業の発展

平成26年10月25日(土)～12月14日(日)

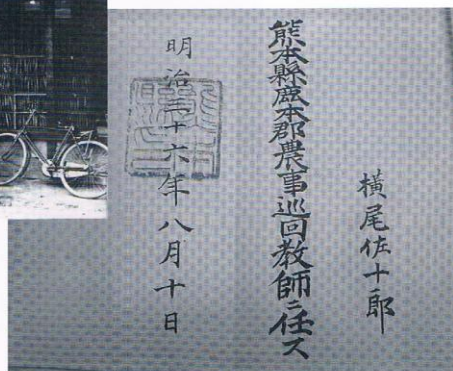
吉井郷土資料館・第41回企画展

養蚕教師と蚕糸業の発展

平成26年10月25日(土)～同年12月14日(日)



高山社横尾分教場



巡回教師任命辞令

明治42年(1909)、日本は清国(中国)を抜いて世界最大の生糸輸出国となった。これにより特権階級の装身品であった絹が大衆化するのに貢献した。

幕末開港以来、生糸は既に日本の海外輸出品の首位を占めていた。維新政府は貿易赤字の解消と富国強兵・殖産興業政策の一環で更に生糸を増産すべく器械製糸工場を増やすシンボルとして富岡製糸場を明治5年(1872)に開設した。器械製糸を増やすと、必然的に原料である繭が恒常的に大量に必要となる。そのため養蚕振興もあわせて進められ、養蚕技術改良普及指導のため養蚕教育機関が創設され、大量の養蚕教師が輩出され、良繭増産に貢献した。養蚕教育機関としては順気社・競進社等多数存在したが、その中心は高山長五郎が創設した養蚕改良高山社であった。高山社は、明治末期には全国に約4万人の社員と約8百人の養蚕教師を擁し、生糸輸出世界一となる原動力の一端を担ったと考えられる。

吉井地区にも高山長五郎の薫陶を受け高山社で養蚕技術を習得した横尾佐十郎はじめとする養蚕教師が多数存在した。彼らの活躍の一端を紹介する。

五、製糸業

吉井地区は、河岸段丘や地質など自然地理環境を背景に、江戸時代から養蚕・製糸・絹織が盛んな土地柄であった。明治になり富岡製糸場ができてもしばらくは座繰製糸が行われていたが、多胡地区の向井周弥らがいち早く器械製糸導入を試みた。吉井地区でも明治20年ころ、多胡製糸社が設立された。明治26年ころより、甘楽社吉井組、碓氷社鎗南組など組合製糸が盛んとなり、明治40年代の生糸輸出世界一に貢献したものと思われる。



甘楽社吉井組・製糸工場

六、養蚕信仰

近代養蚕法が確立されるまでは、養蚕はアタリハズレのあるリスクの大きい産業であったから、人々の心にカイコを神様・仏様・「お蚕様」と称して豊繭を祈願する養蚕信仰が流行していた。

多胡村は江戸時代、多胡早生という桑の原産地といわれ、養蚕が盛んであった。この村の龍源寺では、養蚕の豊繭を祈願した蚕影山像が祀られ、養蚕御札が配られていた。毎年3月23日に御祈禱会をおこない、富岡製糸場開業などにより養蚕製糸業がますます盛んとなり、明治から昭和のころまで縁日には多くの参詣客で賑わったという。



蚕影山像・龍源寺

※（参考文献）

関口覚「高山社にみる蚕種統一の取り組み」（『群馬文化』318号・2014）、など関口氏の高山社に関する論文、高山社を考える会編『写真・絵・図でみる・よくわかる高山社』（2013）、松浦利隆「高山社創成期の研究」（『ぐんま史料研究』第18号、平成14年）、鈴木芳行『蚕にみる明治維新』吉川弘文館（2011）、『群馬県蚕業史』、『群馬県史』、『藤岡市史』、『多野藤岡地方誌』等

高崎市吉井郷土資料館

〒370-2132 群馬県高崎市吉井町吉井285 TEL027-387-5235

六、養蚕信仰

近代養蚕法が確立されるまでは、養蚕はアタリハズレのあるリスクの大きい産業であったから、人々の心にカイコを神様・仏様・「お蚕様」と称して豊繭を祈願する養蚕信仰が流行していた。

多胡村は江戸時代、多胡早生という桑の原産地といわれ、養蚕が盛んであった。この村の龍源寺では、養蚕の豊繭を祈願した蚕影山像が祀られ、養蚕御札が配られていた。毎年3月23日には御祈祷会をおこない、富岡製紙場開業などにより養蚕製糸業がますます盛んとなり、明治から昭和のころまで縁日には多くの参詣客で賑わったという。